

第一部 海の上のペティケート大佐

第一章

ペティケート大佐は、ただ茫然と妻を見下ろしていた。自分の目に映る事実——加えて、彼女の脈を確認した自分の指の感触——は、とても信じがたいものだった。だが、まちがいない。哀れな妻は、死んでいる。

ペティケート大佐の唇から長い口笛が漏れた。それは吹いた本人が、目の前で災難か異常事態が発生したと認識しているしるしだ。彼が発見した光景を考えれば、お行儀のよい——少なくとも適切な——反応とは言いがたいだろう。だが、ペティケート大佐はその瞬間、完全にひとりきりだった。

ほんの五分前まではちがっていた。そのときには、まだソニアがいた。この旅行中、日常的で些細な夫婦の苛立ちを増幅させてきた狭苦しい空間の中でも、彼女はエネルギーを漲らせながらせわしなく動き回っていた。だが、そのソニアはもういない。ここにあるのは、ぐったりと動かない物体だけだ……ペティケート大佐は再度死体に目をやった。見ているうちに、自分の吐き気に気づく。その吐き気も口笛と同様に、突然の出来事に対する反応としては奇妙にちがいはなかった。単なる船酔いだろうか？ 錨を下ろした夫婦の小さなヨットは——今は彼ひとりの小さなヨットになったわけだが——確かに多少は上下に揺れていた。だが長年船に乗り慣れてきたペティケートに限って、それは考えられなかった。そうではない——吐き気の原因は、彼が恐れおのいているからだ。ソニアにはすつか

り裏切られた。彼女が今どんな世界にいるにしても——ペティケート大佐はそんなものをまったく信じていなかったが——すべては俗世のわずらわしさからひとりでだけ解放されようとして、ソニアが仕組んだことなのだ。では、残された自分はいつたい、これからどうすればいい？

ペティケートは懸命に気持ちを落ち着けて、妻が本当に死んでいるのかを再確認した。退役陸軍医である彼の目に、それは疑いようがなかった。彼は舵柄かじぶかのそばに腰を下ろし、夕明かりを受けて銀色に輝くイギリス海峡の水面を眺めた。だが、海は何も語りかけてはくれない。そこには絶対的な中立と無関心があるのみだ。ミセス・フォリオット・ペティケート（哀れなソニアは、プライベートではしばしばそう呼ばれることに甘んじていた）の死など、海には無関係だ。彼が妻の首を絞めたとしても、鉤竿で頭を殴りつけたとしても、その無関心はまったく変わらなかっただろう。だがソニアの死は、完全に自然なものだった。もしもその死が恐ろしく不自然に見えたとすれば、あまりに自然なためにかえってそう感じるだけのことだ。殺人とは、ごく自然なものだ。ジャングルの中はまさに自然なわけだが、そこでは殺人が繰り返されている。自殺も自然なものだ——少なくとも、この絶望的な世界においてそれ以上に分別のある行為はないという意味で。だが、頑なに理性的な人間にとって、無礼なまでに説明不足だと感じることもあるとすれば、彼女の死こそ、その最たるものだろう。

ペティケート自身は極めて合理的な人間だ。今回の件で恐ろしいほどのショックを受けはしたものの、ソニアの死を悼む気持ちはつゆほども湧いてこないことに気づいた。一瞬、自分が冷酷なのかと思った。だがすぐに、誰かの死を悼む気持ちというのはやりようのない怒りを抑え込み、自分も死んでしまいたいという願ひから発生するのだと、以前どこかで読んだことを思い出した。それなら今悲しみが湧いてこないのは、長年妻に対して黙って忍耐を続けてきた証拠なのかもしれない。

そう考えれば、落ち着けそうなものだ。だが奇妙なことに、ペテイクートはより一層不安に駆られていた。立ち上がり、よろよろとキャビンに向かう。巧妙にしつらえた小さなコンロの上には、ソニアお手製のジャガイモのソテーが出来ており、その脇には骨付き肉が四切れ、下ごしらえを済ませて焼くだけの状態で置いてあった。ひとりで四切れとも食べられそうだな、この胃のむかつきさえ収まれば。いや、二切れは明日にとっておいたほうがいいかもしれない。明日はどうなるかわからないのだから。明日だけじゃない、その次の日も——この先ずっと。何せソニアとは、三カ月ごとに入ってきた金を全部使うような生活を繰り返してきたのだ。ソニアは後先も考えず、芸術家らしい見事な使いつぶりを発揮してきた。ペテイクートはそれを気に留めたことがなかった。まさか自分がひとりで残されるとは思ひもなかったからだ。

彼女の命を奪ったのは、どうやら不運な循環器系の障害のようだ。おそらくは塞栓そくせんだろう。それ以外に説明がつかない。自力で錨を引き上げられるほど、極めて元気な女だった。だが彼女は、まさに錨を引き上げている最中に倒れたのだ。そう、きつと検死解剖でも死因は塞栓だったと言われるだろう。いや、動脈瘤のほうが正しいだろうか？ 結婚とともに早期退役したため、こういうことにはすっかり疎くなってしまった。

ヨットが縦揺れすると、滑稽なほどふわふわとしたポンポン飾り付きのスリッパが片方、ドアの前を滑っていった。日ごろから船内の整理整頓について繰り返し返していた軽口を、うっかりソニアに向かって叫びそうになった。ソニアは片づけのできない女だった。正面の小さなテーブルにはタイプ打ちされた紙が散乱し、床の上も同じような紙で足の踏み場もない。ポータブル式のタイプライターには、最後の一枚が刺さったままだ。彼はタイプライターに近づき、残された最後の単語に目をやった。

“inchmate”と云う一語だ——ということとは、それに続くはずの、彼女が永遠に打つことのない単語は“eyes”に決まっている。(彼は底なしの得体の知れない目つきで彼女を見つめた) そんな一文だったにちがいない。ソニアは若いころ、D・H・ローレンス(一八八五—一九三〇。イギリスの作家・詩人)の作品でその言い回しを覚え、それ以来いくぶん趣きの異なる自分の作品の中で使い続けてきたのだ。ペティケート大佐は軽蔑するように床に散乱した紙を爪先でかき混ぜた。「中断された作品か」彼にとっては、より尊敬できざる作家を引用してつぶやいた。(古代ローマの詩人ウエルギリウスに)
よる叙事詩「アエネーイス」より)

フォリオット・ペティケートは極めて合理的な男ではあったが、妻に向ける平然とした態度は、とある激情に駆られた出来事に端を発していた。結婚当初の彼女には、大満足だった。有名人の夫であるのは楽しかった。そして彼女はまがいなく、ある種の有名人だった。ソニア・ウエイワードという名はよく知れ渡っていた。たとえ知的才能や高度な文学的教養を備えた人々の間ではほとんど知られていなかったとしても、少なくともソニアのロマンス小説はイギリスとアメリカ両国の大衆に広く人気を博していた。それは取りも直さず、彼女には大変な収入があつたということだ。そしてそれは、ペティケートにとって満足できることだった。ソニアの人気は、聡明で洗練された夫を陰に押しやる類のものではなかった。彼がその役回りに飽きてきたころには、一緒に自分の立場を品のいい皮肉にできる少数の仲間が集まっていた。何よりも、ソニアは極めて面白い女だった。ひどく起伏の激しい性分で——たまに上機嫌のときにおつてくる感情は、不思議なほど相手を魅了することがあつた。ペティケート本人は魅了されることなくつていたとは言え、そうした感情が長時間——驚くほど長く——耳のそばを勝手に飛び交う分にはまったく気にならなかった。夫婦関係におけるおのれ

の立ち位置については、すでに自分なりの図式を描いていた。つまり、知的才能に長けているために常に一歩引くようにしてはいるが、物静かな育ちの良さから来る礼儀正しさや丁寧さを欠くことのない夫だ。ソニアが自作の登場人物として、痩せた上品な男性のひとりを目立たないながらも印象的な上流階級の一員に仕立てるたびに、ペティケート大佐は彼女が妻としての立場を利用して彼の「コピー」を作っているのだと思っていた。だからこそ、彼女に幻滅させられたあの出来事に対して、ひどく戸惑ったのだ。

それは、彼女の電話の声を立ち聞きしてしまったときのことだ。わざと盗み聞きしたわけではない。ソニアは電話であろうとなかろうと、常に大声で話したので、自分に向けられていない話でもかなり耳に入ってしまうのは避けられなかった。あまりにも日常的すぎて、彼女の話し声など気にしなくなつたほどだ。ただ、ふと何かの言葉が気にかかる、そのまましばらく意識的に聞き耳を立てていることはあつた。その決定的な出来事のとくもそうだった。

「あら、ダーリン、是非うちの主人に会ってやってちょうだい！」

どうやら彼女は、二十年ほど会っていない誰かと話しているようだった——そのせいで、いつにも増して息を荒げ、勢い込んで話していた。ペティケートは面白がって、楽しみながら耳を傾けた。

「いえ、是非、是非によ。昼食か、夕食にうちへいらっしやいな。フォリオットなら絶対にいるから。食事どきには欠かさず、絶対うちにいるに決まつてるわ。それはもう世界一堅物でかわいい男なのよ！」

後になって考えてみると、ペティケート大佐にとって彼女の言葉で一番ショックだったのは、その甚だしい無礼さだった。そのことについては、どうしても許せなかった。小さなキャンピン内に腰を下

ろした背後で、外の船尾にソニアの死体が転がったままの今も、その点がまだ許せずにはいた。

それにもかかわらず、一切れめの肉を半分食べかけたところで、自分が涙を流していることに気づいた。妻も悪い人間ではなかったのだと、本心ではそう考えている些細な証拠だ。だが同時に、彼女が死んだ直後ほど恐怖心を強く感じなくなっているということでもあった。そして本能的に感じていた恐怖に、別の危険を知らせる理性の注意信号が灯った。自分がどれほどソニアに依存していたのか——彼女に生活の糧であるパンとバターは言うに及ばず、キャビアやシャンパンまで賄ってもらうのを頼りきっていたことに——はつきり気づいたのだ。こんな依存心は捨ててしまわなければ。それよりも、彼女を頭から消してしまわなければ。

だが実際には——その後一時間以内に——彼が消すのに成功したのは、ウイスキー・ボトルの中身のほとんどだけだった。彼にとつてそのぐらいの酒は大したことではない。自分の立ち位置——あるいは、誰かに立たされた位置とすべきか——について、いつもアルコールが入ったほうがはつきりする。これまで酒のために紳士らしさを見失うことはなかったのだが、今はそれも失くしていた。こんなときに限ってウイスキーに裏切られようとは。考えなくてはならないことがいくつもあるというのに、頭の中を巡っているものは到底思考と呼べそうにないものばかりだという、そんな考えさえほんやりしてきた。恐ろしいことに、理性的に問題を考える中枢部分が、何やら混沌としたものの底へとどんどん沈んでいく。今はただ、大変な厄介事、実に耐えがたい面倒なことに直面しているのだと自分に繰り返すばかりだ。死体を乗せたままヨットが港に着いたらどうなる？ 見当もつかない——ただし、その手続きは極めて煩わしいものになるはずだと確信していた。あれでソニアとはすっかり縁が切れたかと思つたのに！ 一瞬正気を取り戻し、ウイスキーのボトルを押しつける。たつた今、

素晴らしい考えがひらめいたのだ。ソニアを船から捨てればいいじゃないか？

再び船尾へ向かい、死体の傍らに立った。夕暮れどきで、そろそろ停泊灯をつけねばならない。だが、ほかにヨットはまったく見当たらなかった。今なら何をしようと、それを知る者は誰ひとりない。彼は死体の上に屈み込んだ。まだかなり柔らかい。こういうもの——死体——がどれほど重いのか、すっかり忘れていた。それとも、手を焼いているのはウイスキーのせいだろうか？ もがいてるうちに、何かの手の中で裂けた。ソニアがニットの下に着ていたリネンシャツが破れただけだ。だが、それで新しいアイディアを思いついた。というよりも、どこか頭の中に、まだ引き上げる途中で全貌の見えないアイディアが隠れているような気分になった。そうだ、きっとそうしたほうがいい

……

彼は小さなヨットの中をうろろと歩き回り、そうしたほうがいいと思ったアイディアが何だったのか——ソニアをあのまま船から投げ捨てるよりもいい方法なのか——考えてみた。すっかり足元がおぼつかず、船首へ向かう途中でつまづいたときに、何かの頭の上でひらひらしているのに気づいた。薄暗がりの中へ手を伸ばして掴んでみると、ソニアが脱いだ水着を干してあったのだとわかった。これだ——もし自分にそんなことがうまくできるのなら。彼女が着ている服を全部脱がせ、どうにかこの水着の中に死体を押し込むことができるのなら。干してあった水着を外したものの、ためらった。物理的に難しいという以外にも障害があることに気づいたからだ。一瞬頭の中にとてつもない恐怖が広がった——と思うと、冷たい夜風に吹き飛ばされるかのように、どこかへ消え去った。彼は船尾へ行き、死体の脇に跪いた。服を脱がせるのはわけなかった。ジッパ―やホックがどこにあるかはよく知っていたからだ。だが、次の段階では骨が折れた。水着はまだ濡れている。それが妨げとなった。

作業の半ばで手を止め、彼女の目を閉じさせようとした。職業病だろうか。それとも、ただこの目が気に障るのか。ひよっとすると彼女の目は今も、世界一堅物でかわいい男を見つめているのかもしれない。

それでもソニアは、さざ波ひとつ立てることなく静かに水中へ消えた。ひとたび彼女を船のへりから落とすと——そこまでがひと苦労だったが——死体はただ沈み、輪郭がぼやけ、完全に見えなくなつた。まわりに誰もいないことに安心して作業に没頭した。安心するあまり、いつの間にかひとりきりでなくなつていたことに気づかなかつた。ソニアは左舷側の船端ふなばたから落とした。が、背を向けて右舷側を向いたときのこと——小さなヨットが一艘、すぐ近くにいたのだ。彼は凍りつくほどの恐怖に胸が潰れる思いがした——突然の恐怖に力を奪われ、どうにかキャビンにたどり着くと、膝から力が抜けて床に倒れ込んだ。しばらく震えながら伏せたまま、誰かが呼びかける声か、もしかするともう一艘のヨットが接近する音が聞こえるんじゃないかと耳を澄ませた。だが聞こえてくるのは、自分のヨットの船体に打ち寄せる静かな波音だけだつた。その音すら彼を震え上がらせた。誰かが叩いているような音じゃないか。まるで彼女が叩いているような……

何も起きなかつた。彼は立ち上がり、外を覗いてみた——初めはこわごと小さな舷窓から、次にキャビンから出て。もう一艘のヨットは遠ざかつて小さくなつていた。そうだ、気づかれるはずがない。だが、危なかつた。左舷側から落とすことにしてよかつた。とは言え、自分の不注意だつた——周りをよく見ていなかつた。そんな不注意は今後、命取りになるぞ。

ペティケートはそこで顔をしかめた。どうしてそんなことを思つたのだろうか？ 悪事を行う者、た

たとえば犯罪者が言いそうな言葉じゃないか。自分はそんなものとは関係ない。ただ死体を処分する理にかなつた方法について現代的かつ極めて合理的な意見を採用しただけだ。古臭い感覚を持つ者なら気分を害するかもしれない。喪服を着ないだけでショックを受ける人間はいまだにいるものだ。それにこのことを葬儀屋が知れば、仕事を奪われたと思うだろう。だが自分は自分でできる当然の行動をとつたに過ぎない。今は陸から三マイル以上離れ——明らかに公海上にいる。そして、船長だか艦長だか、あるいはこんな船だと何と呼ぶのか知らないが、責任者は自分だ。水葬を行うかどうかの判断は自分に委ねられている。きつとしかるべき聖書の言葉を読み上げたほうが、少しは慣例に近かつたのだろう。だが、この船に持ち込んだ本の中に聖書は含まれていないのだ。

辺りはほとんど闇に包まれかけており、彼は灯りをつける作業に取りかかった。定期船に衝突されるのはごめん。もしも溺死するのなら、どうにかして、別の海で死にたいものだと思つた。何かが頭の隅で引っかかっている。何だつたかを懸命に思い出そうとした。ああ——そうか。ソニアに水着を着せた理由だ。水葬とは結びつかない気がした。何か別のことを考えていたはずだ。それが何だつたかさえ思い出せば、もつとすつきりするはずだが。

頭を抱えたままペティケートはふらふらとキャビンへ戻つて来た。たしか、どこかにウイスキーがあつたような気がする。ひと口飲めば頭が冴えるかもしれない。だが、今度はウイスキーが見つからない。彼の細く、比較的形の良い鼻のすぐ先にあるはずだが、どういうわけかそのボトルはわざと彼を避けているようだ。疲れたように座り込むと、再び打ちつける波の音に耳を澄ませた。今度はその音に何かを連想させられることはなかつた——毎晩眠りにつくるときに聞こえていたものだという以外には。そう、実に眠気を誘う音だ。